

天狗の鼻

豊島与志雄

青空文庫

むかし、ある所に大きな村がありました。北に高い山がそびえ、南に肥沃ひよくな平野がひかえ、一年中暖かく日が当って、五穀ごこくがよく実り、どの家も富み栄えて、人々は平和に楽しく暮らしていました。

ところがこの村に、不思議なことが起こってきました。夕方たんぼから帰ってきて、いろんなごちそうをこしらえて、一家揃そろつて楽しい食事をしようとしますと、どこからかふいにひどい風が吹いて来て、ランプやろうそくの火を消してしまいます。急に家

の中がまっ暗になったのに、皆びっくりして、大騒ぎをしてからあかりをつけますと、まあどうでしょう、今までお膳ぜんの上に並んでいたごちそうが、一つ残らずなくなつてではありませんか。

——そういうことが、毎晩どの家かに必ず起こつてくるのです。

村の人達は大変困りました。その頃はまだ、電気灯やガス灯とうはなくて、ランプやろうそくをつけていましたから、どんなにしても、ふいに吹いてくる風のために消されてしまいました。雨戸あまどをすつかり閉めきつても、どこからかその風が吹いてくるので、どうにも仕方しかたがありませんでした。しまいには、あかりが消えたらすぐにまたつける用意をしておきましたが、そのちよつと暗くなつた間に、大事なごちそうはすつかりなくなつてしまいました。

それかと言つて、大變勤きんべん勉な村人達でしたから、まだ明るいうちに仕事をやめて夕飯をたべる気にもなれませんでした。

そしてなお不思議なことには、村で一番立派なごちそうをこしらえてる家に、そういうことが起こるのでした。うっかりごちそうもこしらえられませんでした。

一体何者がごちそうをさらつてゆくんだらう？ と村の人達は考えてみました。けれど、いくら考えてもわかりませんでした。何しろ姿も見えなければ音もしないんですもの、ただ不思議な怪物というより外、とうていわかりっこはありません。それでも村の人達は一生懸命になつて、その正体を見届けようと思いました。

するうちに、少しずついろんなことがわかつてきました。大き

な羽うちわを見たという者が出てきました。赤い高い鼻を見たという者が出てきました。緋ひの衣ころもを見たという者が出てきました。何か人間の形をした大きなものが暗い空をふわりふわり飛んでいた、という者が出てきました。

「天狗てんぐだ！」と誰かが言い出しました。

なるほど、いろんなことを考え合わせると天狗に違いありません。きつと貪どんよく欲な天狗がやって来て、羽うちわであかりをあおぎ消して、人のこしらえたごちそうをさらって行つてるに違いありません。村の人達は天狗だときめてしまいました。

ところで、いくら天狗だからといって、そのまま放っておくわけにはゆきません。村の人達はいろいろ相談して、その天狗を捕つか

まえようとなりました。

が、なかなかそうはまいりませんでした。戸の隙間すきまからでもはいり込んできて、音も立てずにごちそうをさらってゆくほどの天て狗いぬですもの、自由自在の術を知っていて、人間の手に捕つかまるものではありません。村の人達は、網を張ったり、罨わなをこしらえたり、棒を持って待ち構かまえたり、いろんなことをしましたが、何の役にも立たないで、毎晩どの家かでごちそうをさらわれてばかりいました。

ところがこの村に、たった一人のなまけ者がいました。ひとり者の爺じいさんで、お金があれば酒ばかり飲んでいて、貧乏なくせにいつものらくらして遊んでいました。大變酒好きなので、しやうじ狸しやうじ々ようというあだ名をつけられて、あまり人から相手にされませんでした。

この狸しやうじ々しやうじ爺じいさんが、天狗のことを聞いて、どうか自分が引とらつ捕とらえて皆をあつと言わしてやりたいものだ、酔っぱらいながら頭を振り振り考えていますと、酒が手伝ったせいか、素敵すてきなことを考えつきました。そしてはたと額ひたいを叩きました。

「しめたぞ！ もう天狗は俺のものだ」

爺おんさんは懇意こんいな家へ行つて、お金をたくさんもらつてきました。

肉や鳥や酒を、うんと買い込んできました。酒はことに強いのを
選びました。そしてひる頃から夕方まで骨折ほねおつて、それは実に見
事なお料理をこしらえました。夕方薄うすぐら暗くらくなると、大きなお膳ぜん
の上へごちそうを飾り立て、強い酒の徳利とくりをいくつも並べ、ろう
そくを何本もともして、天狗が来るのを待ち受けました。

しばらくたちますと、例の不思議なことが起こりました。雨戸あまど
もすっかり閉め切つてあるのに、家の中に強い風が起こつて、ろ
うそくの火が皆一度に消えて、まっ暗となりました。爺じいさんはそ
れを待ち構かまえていたのです。すぐに大きな声で言いました。

「天狗てんぐさん、いよいよ来ましたね。私はあなたが好きで、この通
りごちそうして待っていましたよ。どうかさらって行かないで、

ここで食べていってくれませんか。私はあなたが大好きだから、一緒に一杯やりたいと思つて、酒まで買つておきましたよ」

「本当か？」とだしぬけに、どら声が闇の中から響きました。

「本当ですとも、本当ですとも」と爺さんは大喜びをして答え返しました。「私は決してあなたに悪いことをしようなどと、そんな考えを持ってやしませんよ。私はあなたみたいな人が好きですよ。大変なごちそうをこしらえてお待ちしてたんです。一緒に飲んだり食つたり歌つたりしましょうよ。まあお待ちなさい。私はまっ暗な中では眼が見えませんから今ろうそくをつけます」

爺さんは急いでろうそくに火をつけました。そしてひよいと見ると、まごうかたなき大天狗が眼の前に立つてゐるではありません

か。頭に兜とぎん巾をかぶり、緋ひの衣ころもをつけ、手に羽うちわを持って、白い髯ひげの生えかぶさった赤い顔に、高い鼻をうごめかし、金色の眼を光らして、にこにこ笑っているのです。爺さんはその威光いこうに打たれて、平伏へいふくしてしまいました。

「お前は感心な奴だ」と大天狗は言いました。「酒までたくさんそろええてくれた志こころざしに免めんじて、今晚はお前さかもの家で酒盛りをするとしよう」

その言葉を聞いて、爺さんは元氣づいてきました。そしてこの狸しやうじやう々じい爺さんと大天狗とは、夜通し酒盛りをすることになりました。爺じいさんは狸しやうじやう々じいとあだ名なされてるくらいの酒のみですし、天て狗くはまた名高い酒好きなものですから、ちようどいい相手でした。

けれどそのうちに、二人とも酔っぱらってきました。天狗を酔い
つぶさせるために爺さんが苦心してこしらえた料理ですから、豚
肉の串焼くしやきの中にも、雉の肝きじきもの揚物あげものの中にも、鯉こいの丸煮まるにの中
も、その他いろんな見事な料理の中には、みな強い酒がまぜてあ
りましたし、それを食べながら、さらに大きな杯さかずきでがぶがぶ飲ん
だものですから、二人が酔っぱらうのも無理はありません。爺さ
んは、自分から浮かれだしてきて、歌をうたい始めました。

酒をとうべて、たべ酔うて、とうとこりんぞや、もうでくる、
なよろぼいそ、もうでくる、タンナ、タンヤ、タリヤランナ、
タリチリラ。

すると大天狗は、緋ひの衣ころもの裾すそをからげ、羽うちわで拍子ひょうしを取り、おもしろい足取りで、踊り出しました。

そういうふうにして夜遅くまで酒盛りさかもをしてるうちに、とうとう二人は酔いつぶれて、そこにぐっすり眠ってしまいました……。

夜明け近くになった頃、爺さんは喉のどが渴いてきて、眼を覚ましました。見ると、大きな天狗が、赤い顔をなおまつ赤にし、高い鼻の穴をふくらましていびきをかきながら、自分の側にぐったりと眠ってるではありませんか。爺さんはびっくりして飛び起きました。そしてしばらく首をひねって考えているうちに、昨晚からのことを思い出しました。天狗てんぐを酔てんぐいつぶさして引とらつ捕とらえるつも

りだったのが、自分の方も酔っぱらって、天狗と一緒に眠ってしまつたのでした。それでも、天狗より先に眼を覚ましたのは幸いでした。

爺じいさんはそつと立ち上がって、太い縄を持って来て、まだ眠っている天狗を、いきなり縛り上げてしまいました。大天狗は眼を覚まして、自分の縛られてるのに気づきましたが、もうどうにも出来ませんでした。ただ眼を白黒さしてるばかりでした。爺さんはそれを見て嘲笑あざわらいました。

「天狗の馬鹿やい、とうとう捕つかまつたろう！　今まで村の者のごちそうをたくさんさらっていったから、その罰だと思ふがいい。これから村の人達の前に引き出してやるから、おとなしくしてお

れ。もうこうなったら、どうにも仕方しかたあるまい！」

それを聞くと、天狗はびっくりして身をもがきましたが、手足を太い縄で縛られてる上に、大事な羽うちわを向こうに取落としてるので、何ともいたし方ありませんでした。そしてしまいには、豆のような涙をぼろぼろこぼしました。泣きながら頼みました。

「許して下さい。わしが悪かったです。許して下さい。もう決してごちそうをさらったりなんかしませんから。わしはもとからの悪い天狗ではありません。この姿の通り大天狗で、大勢おおぜいのからす天狗を家来けらいに持って、立派な行いをしていました。ところがわしは、生まれつき鼻がよく利きいて、二里四方くらいは何でもか

ぎわけられるのです。ある時、山の奥から村近くへ出て来ると、人間のこしらえてるごちそうの匂においがして、それを食いたくてたまらなくなつたのです。そして一度盗み食いをしてみると、うまいのうまいくないのって、もう木の実を食つたり霞かすみを吸つたりしているのが馬鹿らしくて、ごちそう泥坊どろぼうになつてしまつたのです。ところが今あなたに縛られてみると、初めて夢からさめたよこころうな心地になつて、自分の悪いことがしみじみわかりました。これからはつまらない欲なんか起こさないで、山の奥に戻つていつて、大天狗だいてんぐに恥じない立派な行いをします。どうぞお慈悲じひに許して下さい。許してさえ下されば、何でもお望み通りにします。一生行いをつつしみます。ほんとに許して下さい。私を村人達の

前につき出してもあなたには何のもうけにもならないでしょう。そのかわり私を許して下さい、何でも望み通りのものを差し上げます」

天狗が泣きながらそう言うのを聞いて、爺じいさんはなるほどと考え込みました。天狗を村人達の前につき出したところで、自分の利益には少しもなりません。それよりも、何か素晴らしいものもらって、許してやった方がましです。その上、天狗はもう一生悪いことをしないと云ってるのです。

「それでは許してやってもよい」と爺さんは言いました。「だが、許すかわりに、この羽うちわをくれるか」

それには天狗も弱りました。羽うちわがなければ天狗の役目が

つとまりません。いろいろ懇願こんがんしたあげく、二里四方も利きくという鼻を譲ゆずつてやることに相談がきまりました。

「ただこんな上等の鼻をもらったからといって、欲を出してはいけません」と天狗は言いました。「欲張ったことをすると、鼻を取り上げますから、そのつもりでおいでなさい」

「よいとも」と爺さんは承知しんちしました。

そこで、大天狗は縄を解といてもらって、羽うちわを拾い上げて、それで爺さんの低い鼻を三度あおぎながら、何か口の中で唱えますと、爺さんの鼻はみるみるうちに高くなって、二里四方のものが何でもかぎ分けられるようになりました。爺じいさんがびつくりしてるうちに、天狗てんぐは羽うちわをはたはたとやりながら、宙に飛び

上がって、どこともなく立ち去りました。

爺さんは天狗の鼻をもらって、うれしくてたまりませんでした。夜が明けると、すぐに表へ飛び出しました。村の人達は、大天狗と同じような爺さんの鼻を見て、驚いたの何のじやありません。そして、しょうじょうじい狸々爺さんを今度は天狗爺さんと呼ぶようになりました。

三

さて天狗爺さんは、大天狗からもらったまっ赤な高い鼻をうごめかして、自分の貧乏な家にじつと坐っていますと、まあどうでしよう。二里四方のものが何でも、眼に見るようにかぎわけられ

るではありませんか。どこにどんな花が咲いているかもわかれば、どこにどんなごちそうが出来てるかもわかれば、どこにどんな酒があるかもわかります。爺さんは家にじつと我慢がまんしてる事が出来ませんでした。晩になるとのこのこ出かけて行って、村で一番ごちそうのある家へやって行きました。村人達はもう天狗が来ないことを知って、いつもより見事なごちそうをこしらえていたのです。

「今晚は」と言つて爺さんは入つて行きました。

「やあ天狗爺さんですか。あなたのおかげでこんなごちそうを食べることが出来るようになりました。まあお祝いに食べていって下さい」

そう言つて、どの家でも爺さんをもてなしました。

爺じいさんは大得意でした。それからというものは、昼間はいい香りのする花を取りに出かけ、それを売つて大變お金をもうけ、晩になると、立派なごちそうやうまい酒のある家をかぎつけて、そこでたらふく飲み食いしました。いくら飲み食いしたつて、たかが老人一人ですから、そうたくさんではありませんので、村人達こころよはいつも快くもてなしてくれました。それにまた爺さんは、村から天狗てんぐを追い払つた大恩人ですもの。

そのうちに爺さんは、花を売つたお金はどしどしたまつてくるし、ごちそうや酒にはあきてくるし、何だか退たいくつ屈くつでつまらなくなつてきました。この上は何か素晴らしいものが、まだ見たこと

も聞いたこともないようなものが、どこかにありはすまいかと、高い天狗鼻をうごめかしながら、じつと考えていました。

すると、どこからともなく、さらさらと涼しい風が吹いて来て、その風上の遠くの遠くに、何とも言えないよい香りのするものがありました。麝じゃこう香でも肉桂につけいでも伽羅きやらでも蘭奢待らんじやたいでもない。いやそんなものよりもつとよい、えも言われぬ香りでした。

「これはきつと天下第一の宝物に違いない！」と爺さんは思いました。

爺さんはもう有頂天うちようてんになって、その宝物を取りに出かけました。

よい香りは、村の後ろの高い山の方から匂におつてきました。爺さ

んは天狗鼻をうそうそさせながら、山の奥へ奥へと登って行きました。ところが不思議なことには、いくら行ってもそこへ行きつきませんでした。行けば行くほど、香りは遠い所から匂って来ます。

「これはきつと大変な宝に違いない！」と爺さんは考えました。

そのうちに、山はだんだん奥深くなって、草木がいっぱい茂っていて、もう路みちもなくなっていました。その上、爺じいさんは長い山路やまじを歩いて来ましたので、腹はへつてくるし、足は疲れてくるし、弱ってしまいました。けれど、ただ宝物を取るといふ欲でいっぱいでした。何もかもうち忘れて進んで行きました。

にわかには、ひとときわ強くぷーんといひ香りがしてきました。い

よいよ来たなと思つて、爺さんは一生懸命に足を早めました。そして山奥の崖がけのふちまで来ますと、あつと言つて立ち止まりました。

まあどうでしょう、崖の下の谷間一面に、素敵すてきな花が咲き乱れてるではありませんか。十じゅうじょうじき 畳敷じょうじき もあろうかと思われるほど大きな百合ゆりの形をした花で、そのビロードのような花びらは、赤や青や黄や紫むらさきやさまざまの色をして、その上に金色の花かふん粉つゆが露つゆのように散りこぼれていて、それをすみきつた日の光が、きらきら照らしているのです。そして涼しい風が軽やかに流れるたびに、息もつけないほどのよい香りが、むらむらと立ち昇つてくるのです。あまりのことに、爺さんはぼんやりしてしまいました。

やがて我に返ると、爺さんは早くその花を折り取ってやりたくなりまして。ところが、崖の上からその谷間に下りるのが容易ではありません。ごつごつした岩の崖で、なんじゆうじよう何十丈というほど高いのです。爺さんはあちらこちら見廻してみても、ようやく一本の葛かずらを見つげ出し、それにすがっており始めました。

ちようど崖の中ほどまでおりますと、どうしたはずみか、葛がぶつりと切れて、あつと言うまに、爺さんはまっさかさまに転げ落ちました。転げ落ちるとたんに、高い鼻が岩角にぶつかって、ぽきりと大きな音を立てて折れてしまいました。

爺さんは谷底で夢中に飛び起きて、一番先に鼻へ手をあててみますと、さあ大変です、天狗からもらった大事な大事な鼻どころ

か、自分の元の低い鼻までも根っこからなくなつて、顔がのっぺらぼうになつてゐるではありませんか。あたりを見廻してみますと、今まで咲き乱れていた花は影も形もなく、自分の足下に、何か赤いものが一つ転がっています。よく見るとそれはまっ赤な高いてんぐばな天狗鼻でした。

「まあこれさえあればいい！」

そう思つて爺じいさんは、急いで拾おうとしました。すると驚いたことには、その赤い鼻がふわりと宙に飛び上がつて、舞い上がりながら次第しだいに大きくなつて、やがては空いっぱいのの大ききさになりました。そして爺さんがあつ気にとられてゐると、その空いっぱいのの大ききな鼻の向こうから、「あははははは」と雷かみなりのような笑ひ

声が聞こえました。

それはたぶん、天狗が笑ったのだろうということです。

青空文庫情報

底本：「豊島与志雄童話集」海鳥社

1990（平成2）年11月27日第1刷発行

入力：kompass

校正：門田裕志、小林繁雄

2006年4月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

天狗の鼻

豊島与志雄

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>